なしの古典はもう聽かれない!!

もつとも、京の花見小路で、生意氣にも、地唄が聞きたいと云つたら、出來る藝者はおばあさんにもなかつた!!

こんな時勢である。

東京でも、反對車の人力を圓タクにしたり、うどん屋を支那ソバ屋に替へたり、角力を野球と入れ替へて、新人ぶつてる馬鹿ばかりが多いのだから仕方がないが、はるばる上方て來て、わざ〳〵骨折つて求めて、上方ばなしの古典に出會はないのは悲しい。

幸ひ、復興期でもあるし、貴重なる御誌の力もある事だし、年に二三度、炎天に冷水を求むる心で上方にやつて來る、はなし好きの筆者が、座ぶとんの上で相格くづす日の、一日も早く來らん事を祈り、併せて、はなし家諸氏が、ぢつくり勉强せられて、古典に歸つて下さる事を望む次第である。

小咄　夕立賣

夕立や〳〵と賣て通る、これは珍らしい商人ぢやと言て居ると向ふの娘が、もし〳〵夕立を三文下さい。これはあんまり少ない何になされます。稗蒔へかけてやります。

（安樂庵策傳作　つくつくし）

ベカコ

笑福亭松鶴

桂米之助畫

エー一席は一人旅のお噂を申し上げます。名前は泥丹坊堅丸と申します田舍廻りの噺家で、所々方々を巡業致しまして、肥前の武雄の湯治場に大黑屋市兵衞と申します旅人宿がございます。此宿へ泊り込みまして、湯治客のお座敷をして頂いて居りましたが、或日の事、大黑屋の表口へお越しになりましたお武家様、

「アヽコレ、市兵衞は宅に在るか」

「ヘイ、何誰様かと思ひましたら、これは菅沼の旦那様でございますか、誠にお久敷うございます」

「アヽ、何日も繁昌ぢやのウ」

「ヘエ、おかげ様で有難うございます」